

瀬戸内海の離島に 国内外から100万人の来訪！

～瀬戸内国際芸術祭2016にて～

国際交流基金 吾郷 俊樹

1 岡山発、宇野行列車にて

岡山発、宇野行列車に乗って驚いた。客の4割は西洋からの、そして多分残りの何割かは東洋の外国からのお客人達。きっとこの列車に乗っている外国からのお客人達は皆、宇野港から香川県に船で行く。瀬戸大橋ができて以来、列車でそのまま高松まで行けるというのに、なぜか船で。目的地は、20分ほど先の直島（なおしま）。多分殆どの日本人も知らない人口3,000人のその小さな島へ。なぜって、そこは彼らを惹きつけるアートの世界があるからだ。

宇野駅を出て、振り返ると、駅は白と黒のストライプに彩られており、既にアートの世界に足を踏み入れていることに気付く。フェリー乗り場に行く途中にも巨大なオブジェが現れる。港に行くと、カラフルな巨大な魚のオブジェが。近づいてみると、空き缶やペットボトルなどのゴミなどを集めて作った淀川テクニックというチームによる作品「宇野のチヌ」。「何これ！」と女性たちの歓声が聞こえてくる。

2010年に第一回が開催された瀬戸内国際芸術祭（第3回は、実行委員会会長 浜田恵造香川県知事、福武総一郎総合プロデューサー、北川フラム総合ディレクター）は、その後3年ごとに開催され、今回は3回目。福武財団が瀬戸内海の島々に有する施設を中心に、直島、豊島、犬島、小豆島などの瀬戸内海の12の島々と高松、宇野の2つの港で国内外34の国と地域の現代アーティストの約200の作品が展開され、2016年3月から11月にかけて、春、夏、秋と3シーズン108日

間に及ぶ。その間、国内外から延100万人を超えるお客人がこのエリアを思い思いに巡り、アートを楽しみ、地元の人たちとも交流する。この芸術祭は、福武総一郎福武財団理事長が、国内の芸術祭の走りである「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」（：3年ごとの芸術祭）の第三回の総合プロデューサーをした後、北川フラムディレクターや香川県などに協力を依頼して始まったという。

ここの強みは、福武理事長のいう「公益資本主義」という考えに基づき、福武財団がベネッセホールディングス株の5.2%を保有し、その配当を原資として、社会に貢献する活動を半永久的に続けることができる仕組み。各地の芸術祭では終わると作品が撤去されてしまうことが多いが、3回目となるこの芸術祭は、過去2回の作品がそのまま残っているものが多く、回を重ねるごとに充実していく。

もう船の時間だ。そのまま、フェリー乗り場へ。「ようこそ、瀬戸内国際芸術祭2016へ。」、瀬戸内の島々が呼んでいる。

2 直島

(1) いざ上陸

宇野港から20分ほど、直島の宮浦港が見えてきた。巨大な赤いかぼちゃがお出迎え。NYでも活躍し、水玉や網の目の表現で知られ、昨年文化勲章を受章した草間彌生の有名な彫刻（赤かぼちゃ）。公式ガイドブックの表紙を飾る作品。直島にはもう一つ、草間の巨大な黄色いかぼちゃがベネ

ッセハウス ミュージアム下の突堤にある。ほどなく宮浦港に到着、ガラス張りのフラットなフェリーターミナルの建物は、妹島和世＋西沢立衛／SANAAというこれまた有名設計チームのアート作品。このSANAAは、撤回された新国立競技場の設計で話題になったザッハ・ハディド氏も受賞していた建築のプリツカー賞を受賞したチーム。

いよいよアートの島へ上陸だ。

(2) ベネッセハウス ミュージアム

建築家安藤忠雄の設計で1992年にオープンしたこのミュージアムのコンセプトは、泊まれる美術館。一体、何時なら空いているのだろうと思えるほど人気があり、当日も8割は外国からのお客様で、当然のごとく予約不能。

ベネッセハウス ミュージアムは、福武総一郎福武財団理事長が「瀬戸内海の豊かで穏やかな自然美のなかにメッセージ性の強い現代美術を置くことによって、そのコントラストから何か新しい価値観が生まれてくるのではないか」、「アートは都会の美術館ではなく自然の中に置いてこそ、作品のメッセージ性が生き、強烈に私たちに語りかけてくるのではないかと思った」ことに始まるという。過度の近代化や都会に対するレジスタンスとして、理念ある文化村を作るとの考えに基づき、東京を反面教師として、「闘う建築家」（、といっても、元ボクサーという意味ではないと思うが）、安藤忠雄に依頼したとのこと。

ここには、レストランもホテルもあり、自然とアートに包まれ食事をし、泊まることもできるという、当時は世界のどこにもない先駆的な場所だった。泊まれないのなら、せめて食事でもと思ったが、宿泊者優先とのことで、またの機会となった。

既にある作品を買ってきたものもあるが、アーティストが直島に滞在し、この場所のために制作した作品が多いのが特徴という。例えば、ヤニス・クネリスの流木を鉛で巻いた巻物を積み重ねた作品「無題」は、アーティストが学生たちとこの場で作った。初めは天井一杯までの高さがあったのが、自分の重みでつぶれて、天井と作品とに



ベネッセハウス 写真：藤塚光政

は相当隙間ができていた。

ここにはまた、北京オリンピックの開会式の花火のオープニングの花火のデザインを演出した蔡國強の「文化大混浴 直島のためのプロジェクト」という露天風呂がある。彼が1995年のヴェネチア・ビエンナーレ（：2年ごとの芸術祭）というイベントでベネッセ賞を取った賞金として新しい作品を直島に作るようになったもの。はじめ更衣小屋が入り口のそばにできたのを見て、アーティストは大きすぎるといって、目立たない林の中に移させたという。この風呂には残念ながらベネッセハウスに泊まらなると入れない。彼は今年、エドウィン・ライシャワー、ドナルド・キーンも受賞している国際交流基金賞を受賞した。文化大混浴には入れなかったと彼に話したら、「また直島に行つて、今度はベネッセハウスに泊まって、入ってください。」と言われた。

ミュージアムショップでは、つい、直島の図録を買ってしまう。ずしりと重い。

(3) 地中美術館

地中美術館というのは、そのまんま、地中に埋まっている美術館である。昔の地下鉄漫才ではないが、美術館がどうやって埋まってしまったのかというと、直島の見晴らしの良い山を一旦切り崩して、美術館を作り、これを埋め戻して建設したものである。これも安藤忠雄の設計らしく、自然光で採光。2004年に開館したこの美術館は特に

外国からのお客人に人気が高く、当日も大盛況で13:30には整理券の配布が終了。

美術館とはアート作品を展示する場所だと思っていたが、ここは、作品に合わせて、美術館を作った。アーティストは印象派のクロード・モネと、多くの人は知らないと思われる、現代アートの巨匠、ウォルター・デ・マリアとジェームズ・タレルの3人、9点のみを常設展示。クロード・モネを水戸黄門、他の2人が助さん、格さんという位置づけらしい。

御本尊のクロード・モネの作品、「睡蓮」は、「クロード・モネ・スペース」という、大理石の小さな石が敷き詰められた部屋に5枚飾られている。この部屋には床を傷つけないため、スリッパに履き替えて入るのは、特別感がある。

ウォルター・デ・マリアの代表作は「ライトニング・フィールド」というアメリカのニューメキシコ州の砂漠に設置された1キロ×1マイルの範囲に、7メートルの避雷針400本が立っているというアート。ポールに落ちる雷を見るというコンセプトの作品だが、実際には19年間に7回しか落雷していないというから随分気の長い話。地中美術館にはデ・マリアのために、ひととき大きな階段状の部屋があり、そこに直径2.2メートルの球体と金箔を施した木彫27体を配置。天窓の自然光で表情が変化。

ジェームズ・タレルは、光そのものをアート作品にする作家。家プロジェクトの中でも彼の作品



地中美術館 写真：藤塚光政

があるが、特に印象的なのは、「オープンフィールド」。8人ずつしか入れないので、並んで待つと、期待感も高まる。部屋に入ると階段の上に青い光を放つ大きな額が飾ってあり、階段を上ると、意外にもその額の中に入っていける。そしてその中に入ると印象は一変し…あとは、行つてのお楽しみとしておこうか。

ミュージアムショップでは、ここの各作品をカバーするハンドブックを買うが、タレルのオープンフィールドの雰囲気は写真では伝わらないかも。

(4) 家プロジェクト

島の空き家を改修して、空間そのものをアート作品にしてしまうのが家プロジェクト。今も人が住んでいる地域で、そこに人が住んでいた頃の時間と記憶が織り込まれているという。1998年に始まり、7軒が集落のあちこちに散在している。

印象深いのは、まず、宮島達男の「角屋(かどや)」。200年ほど前の古い家屋を改修した家プロジェクトの第一弾。宮島は、1988年のヴェネチア・ビエンナーレで真っ暗な部屋に300個の赤いデジタルカウンターをばら撒き、新しいテクノロジーで美しい作品世界を展開。ここでは、床の大部分に水が張られていて、その中に125個のデジタルカウンターの数字が違った間隔で点滅、様々な生物のライフサイクルを示す。このデジタルカウンターは、地元の125人がそれぞれタイミングをセッティングしたという。ここに、島民を巻き込んだ最初のプロジェクトで現代アートと古い建物を組み合わせ、そこに地域の人々が参加するという、新しいアート制作の方程式ができたとのこと。

もう一つ、地中美術館でも見たジェームズ・タレルの「南寺」、これも安藤忠雄設計。もともと作品をもっていたところ、かつて、お寺があった場所に建物を作ったという。しかし、建物と一体となったこの作品、建物ができる前に一体どういう形で持っていたのかは不思議である。光そのものをアートにするというタレルらしい作品で、ここでも随分と待たうえで、ようやく中に入ると、真っ暗闇。やがて目が慣れると、ぼんやりと見え

てくるものがある。後は行ってお楽しみ。

趣が違うが、須田悦弘の「碁会所」は、かつて碁を打つ場所として島の人々が集まっていたことにちなむ。和室が通路を隔てて2つ。その中を覗くと、一方の部屋に椿の花が散らばっているが、これが本物そっくりの精巧な植物の作品を展開する須田の超絶技法の彫刻。もう一方の部屋にも一つだけ作品が。なお、上野の東京都美術館で見た須田の作品は、解説のプレートが付いていないとコンクリートの隙間から雑草が生えているようにしか見えないほどの精巧さに感嘆。

(5) ANDO MUSEUM

安藤忠雄、安藤忠雄、ここでもまた安藤忠雄。コンクリートの打ちっぴなしが安藤建築の特徴。ここでも、外観は古民家の姿を残しているが、建物の中はコンクリートの安藤忠雄の空間が広がる。

ミュージアムショップで「何が一番売れていますか？」と聞くと、安藤忠雄の建築の写真集とのこと。これだけ安藤忠雄作品を見てきたのであればらと見て買ってしまう。中をよく見ると、「!!!」フランス語版に英訳がついている。フランスで出版された本だとのことなので、フランスでも売れるということなのだろう。

ちなみに、東京のど真ん中で安藤忠雄の美術館を見ようと思ったら、六本木ミッドタウンの「21_21 DESIGN SIGHT」に行けばよい。

(6) 直島のお宿、食事

芸術祭期間中は、もともと宿が少ないのに、来客が多いため、宿を探すのは至難の業。ベネッセハウスは当然満室。それ以外の宿は民宿となり、グレードに大きなギャップがあるが、そこも既に一杯。公式ガイドブックに載っている全ての宿に電話しても空室がなく、観光協会のHP掲載の宿にも電話をかけまくったら一軒ヒット。何で予約できたのかと思ったら、そこは公式ガイドブックが発行された後にできたため、地元でもあまり知られていなかったからのようだ。宿は流行りの古民家を改造したもので、屋根裏部屋を含めて3室。

当日1組は西洋からのお客様。おかみさんはもともとはアートが好きで関西から来た若い人。

飲食店も2010年に芸術祭が始まる前は、直島に10件ほどしかなかったというが、今は40件ほどあり、多くは東京などから移住してきた人が経営。繁華街のど真ん中の人気店に入ったら、自分以外は全て西洋からのお客様。マスターに、なんでこんなに外国からのお客様が多いのかと聞いた。夫婦で店をやっているマスターはこともなげに、「そんなの分かりません。お客さんに聞いてください。でも、芸術祭をやっているから今は日本人も来ますが、普段は外国からのお客さんばかりですよ。」と言う。このマスターも5年前まで、東京でサラリーマンをやっていたとのこと。夜はおしゃれなお店に見えたが、翌朝みると普通の古い民家。次の店も半分以上は外国からのお客様。いずれのお店も決して流暢とは言えないが、ほとんど外国からのお客人と普通に英語を話しているのが自然で、瀬戸内海の離島の不思議な光景。

3 豊島 豊島美術館

ここもまたユニーク。かつて産業廃棄物が不法投棄されていた豊島の再生となるような美術館というコンセプトで2010年に作られた。美術館と展示作品の数は作品の数の方が多いものだが、ここは建物に作品が一つ。文化庁に博物館として登録しようとしたら、「博物館は定義上、たくさん展示物があるもの、ここは一つしかないので博物館にならない。」と断られたとのこと。

空を飛ぶのがご趣味だという福武総一郎理事長がヘリコプターで豊島の上を飛びまわり、ここに場所を決めたとのこと。産業廃棄物の島の再生というコンセプトから、美術館を建てる1年以上前に周りの棚田を地元住民と共に再生し、美術館が景観になじむようにしてから建てたという。

この60メートル×40メートルの建物には柱がない。入館前に靴を脱ぐと、「館内のものは、水を含めて触らないでください。」との注意がある。水を含めてとはいったい何のこと??? と思いつ



豊島美術館 写真：鈴木研一

つ中に入ると、そこは、一瞬、これは何だという空間が出現。実際に見ないと、意味が良くわからないが、「毎日、朝から夜にかけて泉が生まれる風景を作り出す、水を用いる作品」となっている。これも体験型のアートなので、詳細は差し控えたいが、多数の外国の人を含めて皆、あるいは、歩き回り、寝そべり、座り込んで、その空間を体感している。

アーティストは内藤礼という、1993年のヴェネチアのビエンナーレのときに、1度に1人ずつしか見られない作品を展示した人。当然のごとく、作品の前には長蛇の列ができ、時間がないのに何だと怒り狂ったアメリカ人ジャーナリストが怒鳴り込んできた。内藤は少しもあわてず、「時間がない人はアートを見る必要はないんです！」と一喝したという。天井に丸い穴が2つ空いた水滴型の白いコンクリート作りの建物は先ほどの直島のフェリーターミナルも設計した西沢立衛の設計で、彼はこの美術館で2012年に日本建築学会賞を受賞。

耐震性上、これ以上低くは作れないというギリギリの低さの建物だという。作品と建物が一体化しているので、美術館の人に「どこまでがアートでどこからが建築ですか？」と聞いたら、困った顔をされた。

同じ形を二回り小さくしたミュージアムショップ、カフェがあり、ついここでも、ハンドブックを買ってしまう。

4 高松

(1) 高松港にて、Liminal Air -core-

瀬戸内海の島々だけではなく、フェリーのターミナルである高松でもオープニングイベントなどが開かれ、作品も展示されている。瀬戸内アジア村という工芸やパフォーマンス、食を扱ったイベントも高松港の近くで開催された。高松の人に聞いても、芸術祭は高松でもやっているよという参加意識は高い。高松港の各島行きのフェリー乗り場のそばに、大巻伸嗣によるトーテムポールのようなカラフルな柱が2本、2010年の第一回の作品が恒久展示。この近くで、この芸術祭を支える「こえび隊」というボランティア部隊が朝礼をするという。

(2) 香川県庁舎

香川県庁の建物は東京都庁舎も手がけた丹下健三の代表作品で芸術祭の会場にもなっている。1階ロビーには白地に赤の三越の包装紙をデザインした猪熊弦一郎の壁画や丹下健三に関する展示があり、意外と可愛い丹下直筆の手紙もある。各地から建築関係者が建物の視察に来るといふ。

5 犬島

(1) 犬島精錬所美術館

直島の地中美術館の後にできたのが、2008年オープン犬島精錬所美術館。近現代の日本の発展の陰で大きなダメージを受けた島だったことから、それをアートで再生させたいという思いでここに建てられたという。

犬島には、1909年から10年しか稼働しなかった銅の製錬所が廃墟となって放置されていた。ピークには3,000人の人が暮らしていたというこの小さな島は、銅価格の暴落により製錬所が廃業になると著しく人口が減少し、今は50人ほどの住民が住む。産業廃棄物の投棄場になるといふ話があったところ、福武理事長が買い取り、美術館を建てた。

アーティストは、犬島に住んだこともある柳幸典。三島由紀夫が若い頃住んでいた家を解体した

廃材を猪瀬元東京都知事から頼まれて福武理事長が取得していた。そしてこれを使って、三島邸をモチーフにした作品を作ってほしいと柳に依頼したという。



建築家は、当時まだ大きな建築を手が

犬島精錬所美術館 柳幸典「ヒーロー乾電池／ソーラー・ロック」(2008)
写真：阿野太一

けたことのなかった、空調に風・太陽・水などの自然エネルギーを使って設計する三分一博志。彼はこの作品で、日本建築大賞(2010年)、と日本建築学会賞(2011年)をダブル受賞。

ここも体験型なので、詳細は差し控えたいが、美術館に入ると、太陽がどこまでも追いかけてくるような錯覚に陥る回廊が延々と続き、その果てに大きなホールに出ると、三島由紀夫の部屋がぼっかりと宙に浮かんでいる。ここは、夏は地中熱で冷やし、冬は太陽光で温める、全て自然光照明のため、16:30に閉館する。

なお、三分一は直島でやはり自然エネルギーによる空調の直島ホールも設計しているが、島の人によると、「名前は三分一だが、費用は三倍かかった。」ともいう。

このミュージアムショップでも、ハンドブックを買う。

(2) 犬島「家プロジェクト」

犬島にも、アートと建築が島の風景や暮らし、人々と一体になるように展開する家プロジェクトが散在。建築は直島の船着場と同じ、妹島和世。

特に印象的なのは、I邸のオラファー・エリアソンの作品。室内にある鏡を覗くと、なぜか自分の顔は見えずに、後ろ姿が見えるという不思議な経験。

向かい合う3つの鏡が構成する面白いカラクリ。

6 おわりに

海外からみて、おそらくもっとも有名な日本の芸術祭は、3回目を迎えて、更に充実。瀬戸内海の離島に100万人以上の人が集まるというイベントの動員力は驚きだが、実際行ってみると、納得感がある。この芸術祭には「こえび隊」という国内外からのボランティア部隊が多数参加。彼らは自費でやってきて、お寺で合宿生活をしながら、芸術祭をサポート。海外からも約140名が参加したという。シンガポールからのこえび隊の女性と話したが、楽しくて仕方がない様子。地元の人のみならず、国内外からのボランティアも一体感を持って参加しているような印象。芸術祭の効果か分からないが、男木島では、休校中だった学校が復活するなど、移住者も増えているようだ。寄付協賛も400件以上の個人・法人から2億円以上集まったという。

ここでは、展示系の作品を中心にご紹介したが、この芸術祭、各地でパフォーマンスアートなどのイベントも開催されており、アジアからのパフォーマーを招聘しての「瀬戸内アジア村」等について、アジア諸国との国際交流の促進のため、国際交流基金も助成している。

(主な参考文献)

- ・瀬戸内国際芸術祭2016公式ガイドブック アート巡りの島ガイド、現代企画室
- ・直島から瀬戸内国際芸術祭へ 美術が地域を変えた、福武總一郎+北川フラム
- ・アートを生きる、南條史生
- ・Remain in Naoshima Naoshima Contemporary Art Museum, Benesse House
- ・地中ハンドブック、公益財団法人 福武財団
- ・TADAO ANDO|NAOSHIMA, Le Bon Marche Rive Gauche
- ・豊島美術館ハンドブック、公益財団法人 福武財団
- ・犬島精錬所美術館ハンドブック、公益財団法人 福武財団
- ・瀬戸内国際芸術祭2016のwebsite <http://www.setouchi-artfest.jp/artworks-artists/artworks/naoshima/>
- ・ベネッセアートサイト直島のwebsite <http://benesse-artsite.jp/>